



TITLE:

『金瓶梅』における住まいの諸場所の意味についての研究—女性と宴会・儀礼との関係を通じて—(Abstract\_要旨)

AUTHOR(S):

上, なつき

---

CITATION:

上, なつき. 『金瓶梅』における住まいの諸場所の意味についての研究—女性と宴会・儀礼との関係を通じて—. 京都大学, 2015, 博士(人間・環境学)

ISSUE DATE:

2015-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k19083>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開; 許諾条件により要約は2016/03/22に公開

京都大学	博士（ 人間・環境学 ）	氏名	上 なつき
論文題目	『金瓶梅』における住まいの諸場所の意味についての研究 －女性と宴会・儀礼との関係を通じて－		
（論文内容の要旨）			
<p>本博士学位申請論文の題材である『金瓶梅』は時代背景が宋代に設定されているが、実際の作中に投影されているのは明代後期の社会であるという。この小説は西門家という限定された家を舞台に、その主人と妻妾達の濃密な人間関係が描かれ、当時の封建社会における男性の女性支配を反映している。この『金瓶梅』の作品的特徴としては年齢、行事の日付、住宅の構造といった日常生活の細かな描写があることが挙げられ、成立当時の社会を知る上で第一級の歴史的民俗的史料とされる。</p> <p>本論文では西門慶邸宅を対象として、その平面構成に示される諸場所の意味を明らかにしている。その上で、年中行事や通過儀礼における女性の行為の儀礼的な意味を、住居における諸場所との関連において解釈している。</p> <p>本論文は3章からなる。第1章では、西門慶邸宅に関して、孟慶田による平面図に加えて、青木正夫・周若祁等の平面図を『金瓶梅』の本文と照らし合わせて検討し、この邸宅の平面構成に示される諸場所の位置づけを分析している。その結果、奥の儀門は邸内の境界であり、その北は男性が出入りし難い、妻妾らの日常的空間であったとしている。そして、門より南は男性が日常的に使う空間で、妻妾達は出入りを控えるべき場所であったということを指摘している。</p> <p>大庁と前庁は同じ建物であるが、大庁は高官の応接や主人の人生における節目に当たって公的宴会を行う時の呼称で、前庁は正妻の親族などを、私的に招く空間として意味づけられている。後庁と上房は同一建物で、前者は妻妾の親族を呼ぶ会など準公的意味、後者は宴会の控え室など裏方として位置付けられていたと解釈している。更に前庁(大庁)と後庁(上房)は、前者が外向きの空間、後者が内向きの空間という意味をもち、場所的意味に差異があることを明らかにしている。</p> <p>第五夫人、第六夫人の住まいは庭園内にあり、庭園への入口が表の儀門の前の院子に通じることから、奥の儀門の奥にある他の妻妾の住まいとは位置付けが違い、この二人は他の家族に比べて「外」的存在として位置付けられていることを指摘している。そして、その「外」的存在である第六夫人が男子を産み、この家の中核を占めるようになることが作品の軸を形成しており、住まいの場所が作品の骨格を形成する上で重要な意味をもつことを指摘している。</p> <p>第2章では、年中行事の元宵節の宴会における女性達の行為の意味を、それが行われる住居における諸場所との関連から読み取り、女性達が果たす役割を明らかにしている。</p>			

作品成立当時、女性は外出を慎み、日常的には邸宅の奥に籠居し、異性との接触を極力避ける生活習慣をもっていたが、そのような女性達が一年のうち外出できる数少ない機会が正月十五日の元宵節であり、この時期に限って同性同士で集まって交流することができたことを本文から読み取っている。そして、女性達はこの時期、日常的には男性達が使う邸宅の表側の空間を使って宴会を行ったことを指摘し、その意味を考察している。

元宵節時期には、女性達が自分達の領域を「内」の領域から表側の男性の領域まで伸ばして宴会を行い、招福除災の「門戸の祀」を行い、それから「内」に戻る。そのような一連の行為をなすことを見出し、それによって女性達はその年一年の男性や家の運氣上昇を支える役割を果たしていることを明らかにしている。それと同時に、女性達は他家の女性達と交流を行っていることをも指摘している。

第3章では西門慶の葬礼について、女性達の行為をめぐって、その儀礼的意味と役割を検討している。

その結果、西門慶の葬礼において、女性達は、「内」の領域である上房などにおいて、死というこの世からの旅立ちの準備として死装束を整える役割を果たしており、五七の日には尼僧の読経によって死者の成仏を願って新たな出発を見届けると共に、故人の霊を位牌に迎える役を担っていたことを明らかにしている。葬礼は死者をあの世へ送り出す儀礼であると同時に、故人やその家の社会的地位を示す行事であるが、女性達は前者において重要な役割を果たしており、それによって葬礼が成り立っていたという見解を示している。

また西門慶の死と時を同じくして誕生した新当主を代行して母親の呉月娘が上房において葬礼を裏方として取り仕切ることで、女性達が表ではない周縁的な位置や裏側から重要な役割を担い、ひいては彼女達が家を支えていることをも解き明かしている。

以上のように、『金瓶梅』に描かれる女性達は、日常的には邸宅の奥の「内」の領域に籠居しているが、それが必ずしも女性達を社会的に隔離し、閉ざされた存在にはしていないとし、特別で限られた時だけとはいえ、女性達は男性達を邸宅から「排除」する形で表側の空間まで出て来て宴会を行ったり、死者の旅立ちに寄り添い、見届けたりすることで葬礼そのものを成立させ、それに際しては外部の女客、必要があれば男性とも交流していることが見出され、その一連の女性の行為の意味から、女性が家の秩序を支えていたことが理解できると結論づけている。

(論文審査の結果の要旨)

本博士学位申請論文は『金瓶梅』を題材とする研究である。作中の宴会と通過儀礼を事例として取り上げ、そこでの女性の行為の意味を住まいの諸場所との関係で解釈し、住まいを通じて、女性が果たしている役割と社会的な位置づけを明らかにしている。中国の宴会研究としては、西澤治彦による論考があるが、それは男性の宴会を対象としている。本論文では女性の宴会を取り上げており、これは『金瓶梅』を題材とすることで初めて可能となる研究課題といえる。

論文は3章からなっており、第1章では、まず西門慶邸宅の平面構成における諸場所の意味を解明している。従来の建築学の分野では小説本文から、舞台となった西門慶邸宅の平面構成を解明することが試みられてきたが、ここではそれらの場所の意味を読み取っている点に独自性がある。

その結果、西門慶邸宅の描写に現れる「大庁」と「前庁」は同じ建物を指しており、「大庁」は公的宴会を行う時の呼称、「前庁」は私的に人々を招く空間としての意味をもつことを明らかにしている。また、「後庁」と「上房」は同一建物で、前者は準公的意味、後者は裏方的意味をもつとする。さらに前庁（大庁）は外向きの空間、後庁（上房）は内向きの空間とされ、場所的意味に差異があることを明らかにしている。以上のように住まいの諸場所の意味を多層的に解明している点で高く評価できる。そして、李瓶児の住まいが他の妻妾の住まいに比して「外」の存在として位置づけられているが、彼女が男子を産むことで家の中核となることがこの小説の軸を形成しており、住まいの場所が作品成立において重要な意味をもっているとしていることは意味深い指摘と言える。

第2章では、年中行事の元宵節時期の宴会における女性達の行為の意味を読み取り、女性達が果たす役割を明らかにしている。女性達が外出できる数少ない機会としての元宵節に、女性達が「内」の領域から日常的には男性達が過ごす表側の空間まで自分達の領域を伸ばして宴会を催し、さらに招福除災の「門戸の祀」の後に「内」に戻るという一連の行為を行っており、それがその年一年の男性や家の運氣上昇を支えていたとを解釈している。以上のように女性達は男性を邸宅から「排除」し、内-外-内と移動することで家の運氣を更新しており、単なる家の奥に籠居する存在ではないことを明らかにしていることは従来の研究にはない新しい知見をもたらしており、高く評価できる。

第3章では、西門慶の葬礼において、女性達の住まいに果たす役割を明らかにしている。この葬礼において、「内」の領域である上房などにおいて、女性

達は死装束を整える役割と、五七の日に成仏の祈願と共に故人の霊を位牌に迎える役割を担っていた。葬礼が死者を生前の世界から死後の世界へと移行させる儀礼であるとするなら、女性達はその移行の最初と終わりを担っていたのであり、葬礼の成立に深く関わっていたことになる。従来、葬礼研究では『朱子家礼』に則って大庁（前庁）で行われる式次第が詳細に論じられてきた。しかし、葬礼における女性の役割に着目する本研究は、中国の住宅における上房（後庁）の重要性を見出している。つまり、あの世、この世という宗教的世界において住居が位置づけられる時、その中心が正妻の呉月娘の住まいである上房（後庁）とされていたことを明らかにし得たことはこの論文の特筆すべき成果といえる。

従来、中国明清代の女性は、住居において籠居する社会から閉鎖された存在として位置づけられてきた。それに対して本論文は、宴会と通過儀礼において女性が果たす役割は重要で、単に男性に庇護されるのみの存在ではなかったことを解明している。これは、『金瓶梅』の詳細な読解を通じて住まいの諸場所の意味を解釈するという著者独自の方法論によってなされており、新しい研究方法を提示している点においても高く評価できる。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成27年2月2日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：2015年3月24日以降